

ると同時に創造する。自然や世界に對する獨自の新しい關係によつて、諸他の價値に新なる適用の途を開き、又その一々の作品によつて、略取者の勇猛と支配者の忠實とを證示する。彼が未來と結合するは唯既成を鞏固にするためである。古來常に此の如くであつた——希臘の黄金時代に於いても、ジョットーの時代に於いても、十五世紀に於いても、エネチャ派に於いても、ミケランジェロの羅馬に於いても、レンブラントとルーベンスとの北方に於いても。流派の力が強ければ強い程、その上に浮び出る人格の態度は益々偉大となり、現在の法則を超駕して、更新せられたる古法に従ふの趣は愈々鮮かとなる。此處に藝術の不滅に對する保證と、靈魂の不滅に對する驚く可き保證とがあるのである。何となれば其處に吾人の精神の神聖なる不安と、如何なる有限の目標によつても飽滿することを得ざる追求と、その寛容とその信仰とがあるから。流派と藝術家とは猶世界と人間とである。流派の中から流派を征服するの力を汲むを得ざる藝術家は、精神として

は死者である。さうして世界を自己の地位に高めることを得ずして却て自己を世界に遺棄する時に「メンシエンツーム」の死がある。

今日の畏怖を知らぬ人達の最大缺陷は、人格と流派との正當な對立を知らないことである。彼等は風車に向ふ様に衆俗に向つて挑戦する。而も自分自身と戦ふことを知らない。私は巴里の展覽會を通過する時に、唯處方箋を見る。教師のない流派を見る。頭のない群集を見る。昔は小展覽會の隅にも迫害された獨立者が隠れてゐた。彼等は型を同じくするが故ではなく、唯光と場所とを買ふ爲に一緒になつてゐた。併し今日に於いては、到る處に一樣の型、一樣の筆戲があるばかりである。今日、セザンヌやファン・ゴッホの旗印の下に現代人のチャキ〜になることが、デュランやブーゲローに従つて眞正な匣繪師になるよりも容易なことを見せつけられるのは、苦い經驗である。(後者が前者より六ヶしいのは、遠方から文學らしい音をきかせるいかもの自由詩を書くよりも、法に協つた通俗小

説を書く方が六ヶしいのと全然趣を等しくしてゐる。筆戯は手段の爲に目的を忘却することである。其模範とする處が高いものでも低いものでも、愚劣な點に於いては變りがない。皇帝キルヘルムを神様に描き上げるのも、ポツ／＼のある裸體婦人を描寫するのも、よろ／＼するエツフェル塔や三角から組立てられた顔を描き出すのも、筆戯の點に於いては同様である。

此事を今日の英雄諸君は忘却してゐる。彼等は「表面」を除く一切のものを忘れてゐる。彼等は如何なる點に於いても平面美術家である、人間としても平べつたい。固より獨逸の指物師が木の取扱ひに興味を持つ如く、最も勝手放題の巴里つ子でも、色の取扱に於いて其趣味を示してゐるに違ひない。此事を感謝せむと欲する人は勝手にするがよい。吾々にとつては贈物の代價が高過ぎるのである。極めて少數の有望者に對しても吾人は此代價を忘れることが出来ないのである。新人の悉くはその巧藝を運搬の出来る仕掛物の様に自己の前に陳列してゐる。仕

掛のうしろに誰かがゐるだらうか。仕掛のうしろに誰もゐないだらうか。原則として仕掛は一人ぼつちである。さうして「人」はカフェに坐つて荒つぽい演説に餘念がない。

併し近よつて見れば何の荒つぽさもなく、彼等は馴らされた小羊の様に人なつつかいのである。彼等の「荒さ」も單に馴らして拵へたものに過ぎない。ドラクロアの（此人は静かな市民に過ぎなかつた）勇猛も、マネーの（此人はそのオランピアを展覽會に出すことを敢てしなかつた）革命的精神も、セザンヌの（此人は生涯展覽會に憧れてゐた）冒險も、其影だにとゞめない。此等の「荒い人達」の大多數は其根柢に於いてはアントン・フォン・エルナーをありつたけ集めたよりもつとひどいアカデミー家である。彼等の極り文句の大多數は、天國の人となつた古典家のあらゆる法則よりもまだ氣まぐれである。彼等は凡ての形式が多かれ少かれ數學的關係に約することが出来ることを思ひ付き、又或有名な人が脚を柱

にたとへ、頭を圓球にたとへた言葉を知つてゐた。其結論は、身體の、柱にも圓球にも似寄らぬ部分をば無理にひつこませることである。又「身體はブリズムの様に見える」と他の者は云ふ。誠にそれはハムレットの崇高な洒落にもある通りである。併し私の見る處では描かれたるブリズムはまだまだブリズム臭くなさずぎる。私はまだ立方を通じて立方家を、魯鈍なフィリスター面を、アカデミー風の鼻を、忠實な眼を、波を打たせた卷髪を見るのである。又他の或者は、マレースの血と汗とを絞つた傑作の中に、並行主義パラレリズムを認める。其の結論は並行主義と矛盾する一切のものを截りすることである。

何處に往かむとするか。

微細なる徴候を察するに、美術の悲劇的終局は迫つて來た。まだ此處彼處に、時代の喧騒に迷はされぬ大家が残つてゐても、彼等は潮流を制止するに足る程の弟子を持つてゐるさうにもない。而も恐る可きは、此等のことが従前の一切のこと

と等しく、發展史の論理的結果であるらしいことである。恐る可きは此の如き創造力の低下が、美術の存在に不利益なる社會的事情の顯現と共に、著しくなり行くことである。危険なるは繪畫の發するがむし、や、らな叫びよりも、寧ろ觀客の遲鈍なる感情である。群集の停止する處なき鈍麻である。何の花火をも發せぬ氷結である。

精神は此事實に對する類似を求める。それは野蠻人によつて成されたる古代文明の破壊であつた。併し今日の民族大移動は西から始まつて東を脅かすのである。それは新しい大陸から來た。彼等は精神的資産なしに生きる術を學んだ最初の民族である。さうして彼等は曾て東方から來た野蠻人のやうに、神像を破壊することをせず、神性そのものを、神性を産める思想そのものを破壊する。他日如何なる歴史家が此の非常なる群集本能大移動の經過を叙述するであらうか。これはそれが既に戸の前に立つに關らず、今日吾人が未だ名く可き所以を知らざる民族

病である。吾人は流行病に對する時と等しく、之れに名くる爲に外國語字彙をひつばらなければならぬ。さうして或者は之を讚美して文明の結果だと云ひ、或者は美術品を購ふに響きの宜しい金貨を以てするの故を以て、之を美術の推進者だと云ふ程まで、此病は今人の血に深く喰ひ込んでゐるのである。

我等は何をなす可きであるか、美術家の背後には更に偉大なる力が潜んで之を操つてゐるとすれば彼等を攻撃するも甲斐ないことである。吾人は寧ろ一度は見なければならぬものを、早く見せてくれたことに就いて彼等に感謝すべきである。

見るを學ぶより外に吾人の力に及ぶ何物もない。眞實に危険の存在を見る者は、其進路を何處に求む可きかを知り、團結して事に當る可きことを知る。悩みを共にするを得る時に、吾人は既に殆んど救はれたのである。吾人の努力す可きは、所謂現代人の騷擾を外にして、二三の眞摯なる事物を知れる靜默なる少數者の養

成である。衆俗の狂暴なる強迫に従はずして、その神性に對する憧憬を告白する者は高貴なる性情を持つ者である。

獨逸は古來理想主義者の國として通つて來た。固より人は此名稱に伴はしむるに幾多の愚かなることを以てした。特に美術に於いては、此名によつて幾多の滲晦事が行はれた。併し今日は此名譽章を輝く盾として、相續の國に踏み入る可き時である。生存の懸念によつて、恐くは唯一時的に詩神から遠かつたに過ぎない佛蘭西人の遺産と、ゲーテ以來唯精神に於いてのみ人間生活の完成を認めて來た獨逸人の遺産と。

曾て羅馬が基督教に改宗した時、帝座の上に立つ一人の人がゐた。希臘の神々に對する憧憬は彼を英雄にした。彼こそ背教者ユリヤヌスである。彼は權力によつて國民を美に奉仕せしめむとした。さうして彼は没落した。今日と雖も、若し權力を以て、國民を唯物主義中より救はむとする帝王があらば、彼の運命はユリ

ヤヌスと撰ばないであらう。ユリヤヌスは思想を権力問題としたから誤つたのである。少数者にのみ恵まれるものを群集に期待したから迷路に陥つたのである。實に彼自らが既に餘りに多くガリラヤ人であつた。併しユリヤヌスの外に亦知られざる夢想家がゐた。さうして長くアポロに歸依し、其思ひを詩神の群に繋いだ。

かくの如くにして、暗黒を極めたる數百年の野蠻時代の後、人は、基督教殿堂の石像の中に、希臘諸神の美はしき微笑が、花と咲ひのを見ることが出来たのである。(二七、二〇抄)

三、象 徴 論

(Hoffmannsthal の Ueber Gedichte を抄す)

クレメンストとガブリエルが窓傍に坐つて詩集魂の四季(Das Jahr der Seele)を讀んでゐる。二人で二三の詩を讀んだあとで

クレメンスト 此「四季」は美しい詩集らしいね。併し何故「魂の四季」なんて洒落れた名をつけたんだらう。僕は飾り氣のない標題の方が好きだ。

ガブリエル 僕だつてさうだ。併し此標題には何の飾り氣もないぢやないか。此中には秋がある、同時に秋以上がある。此中には冬がある、同時に冬以上がある。此等の四季や此等の風景は「他の物」を擔ふ爲の存在に過ぎない。

感情や、氣分や、其他内心の最も神祕な、底深い様々の状態は、風景や四季や、空の色や、風の氣息と一つに織られてゐる。蒸暑く、星影のない夏の夜にも、床

石の濕つた匂にも、乃至如何なる地上の物にも、人間の心昂りと、憧れと、醉歌と、一言で盡せば人間の「心」の凡てが結付けられてゐる。否單に結び付けられてゐるばかりではない、命の根を其處に絡んでゐる。ヒ首を振つて心の根を外物の地盤から截り放したら、心其物もいぢけて消えて了はう。自己を見出さうと思ふ者は心の中に沈溺してはいけない。須く眼を外に向く可きである。人間の魂は空に懸る虹の様に、存在の絶間もない流轉の上に自らを張つてゐる。人間は自己を所有してゐるのではない、自己が自ら外から吹いて來るのだ。自己は久しく外に逃れてゐた。逃れた者が「氣息」に乗じて還つて來るのだ。一體自己と云ふ言葉は比喩に過ぎない。其實は遠い昔に此處に巢を構へてゐた心の閃きが還つて來るのだ。尤も、還つて來るのは昔の儘の心の閃きでなくて、昔巢を構へてゐた者の子供が遙かなる望郷の思に驅られて來るものかも知れないが、孰れにしても何物かが還つて來る。何物かが還つて來て僕等の中で他の何

物かに面接する。人間の心は鳩小舎に過ぎない。

クレメンヌ 僕は全く違つた道を辿つて同じ様な思想に到着した。一體人間に本性と云ふ様なものがあらうか疑なきを得ない。外界の強い力を考へると恐しくなる。

ガブリエル 併し人生をかう考へることは詩に應用すると頗る面白いことになつて來る。此考から行けば詩は心臓の狭い部屋に跼蹐する代りに、無窮の大天地を其の住家とすること、なる。詩は古希臘の紫輝く雲の丘に憩ひ、風に戦慄く木々の梢に宿り、肉に媚びる夜の風に眠る。此の如きあらゆる輪廻、あらゆる冒険、あらゆる深淵、あらゆる庭園から、詩の齋し歸るものは唯人らしき感情の慄へる氣息である。遠く高く天に翔つて其光景を身に沁めて來ても齋す處は矢張り人間の感情に過ぎない。詩の飛翔する處に限界はないが詩の本質には限界がある。詩は人間の言葉だから、天地の間を探つて持ち歸る物も人間の感情

以外にはあるを得ない譯だ。

クレメンヌ 詩は單なる言葉ではない、詩は調子を高めた言葉だ。詩には比喻と象徴とが多い。詩は一物に代へるに他物を以てする。

ガブリエル 何と云ふ奇怪な考だらう。詩と云ふ物は決して一物に代へるに他物を以てする物ではない。詩は事物其物を表現しやうと命がけで努力してゐるものだ。日常生活の鈍い言葉とは丸で違つた力と、科學の弱い術語とは丸で違つた魔力とを以て事物の本體に迫るものだ。何處に行つても金を選つて舐める御伽噺の鬼火の様に世界と夢とのあらゆる像から咽を鳴らして其核心と本質とを吸ひ取る外に詩のする仕事と云ふ物はない。其吸ひ取る動機さへ鬼火と等しく、詩は事物の精髓を喰つて生きてゐるものだからだ。關節と割れ目の一切から金を吸ひ取らなければ自ら消えて了はなければならぬからだ。

クレメンヌ それでは詩には比喻はないのか。それでは象徴はないのか。例へば

君の好きなヘッベルか誰かの「二羽の白鳥」と云ふ奴はどうだ。

ガブリエル ヘッベルの

黒き波に揺られて

二羽の閃く白鳥迂り來る

風は次第に波を高め

霧は暗く重たげに沈む

白鳥は別れて

惱めり

今や彼等は之に堪へず

彼等は今情に燃えたり

彼等は今愛を思ふ

霧に包まれ波に揺らるゝの愛を、

彼等は媚び、彼等は褻る
彼等は荒る、波に逆ひて
二つのもの一つに寄り添ふ
大波逆まに立てば
戀と恍惚との死ぬ許りなる深みに
白鳥は身を焦し且夢む。

静かなる情の後の
甘き疲れ。

夢の間に大波彼等を別ちぬ。
鳥よ静に憩へ

汝等は再び相見るを得じ

日は暮れて黄昏は来る。

と云ふ意味の詩だらう。此詩は状態を表してゐる。状態のみを表してゐる。憫みある歡樂と、悲調を帯びた大膽とに充ちた深い深い精神の状態を表してゐる。凡ての詩は(少くとも良い詩は)精神の状態を表すものだ。此處に詩の存在の理由がある。

クレメンス 處で二羽の白鳥は如何だ、それは象徴ぢやないのか。

ガブリエル 二羽の白鳥は唯二羽の白鳥を表す許りだ。但し白鳥は白鳥でも詩の眼で見た白鳥を意味することは云ふ迄もない。詩の眼は一切の物を見る毎に今始めて見る如く新しく見る。其存在の不思議を以て凡ての物を包む。此眼で見た白鳥は白く輝く羽毛の静かなる寂しさを持つて、悲しげに又悪びれずに黒い水に輪を描く白鳥である。死の瞬間に奇しく美しい物語を有する白鳥である。

此眼で見れば凡ての動物は神が言葉では表し得ない神秘を此世界に書き付けた、生きた象形文字に外ならぬ。神の隠語を其文章に織り込むことを許された詩人は仕合者ぢやないか。

クレメンス それでは君が詩は一物に代へるに他物を以てするものではないと云つた言葉と矛盾するぢやないか。

ガブリエル 決してそんなことはないさ、若し詩が一物に代へるに他物を以てする物ならそれは人迷はせの狐火に過ぎない、生きた樹につけた紙の花に過ぎない。白鳥は言葉ではとても言ひ表せないものを表す爲の隠語だ。此微妙なる魂の感動を表すに足る様な思想上の言葉も感情上の言葉も存在しないから、夜陰に包まれた白鳥が一つの影繪として此感動を外に放射するのだ。實際僕も此事實を表す爲に「象徴」といふ言葉を使ひたいと思ふ。併し象徴の字は僕をムカムカさせる程淺薄なものにされてゐる。象徴の話は子供か信教者か詩人と許り

す可きものだ。子供にとつては一切が象徴である。信教者には象徴が唯一の眞實である。詩人の眼には象徴しか映らない。

クレメンス それでは話が飛ぶぢやないか。それは信仰上の象徴だらう。現在の問題は詩だ。

ガブリエル 象徴の意義を純粹にする爲に先づ此處から話を進めるのだ。先づ犠牲の起りを想像して見て呉れ給へ。茲に云ふ犠牲とは牛や羊や鳩を殺して其血と命とを獻げる犠牲の意味だ。一體人はどうして犠牲によつて怒つてゐる神を和めることが出来るかと考へたのだらう。之を想像するには異常な官能の力を要する。雲に包まれ生命に酔つたオルフォイスの官能を要する。茲に犠牲を獻げた最初の人を脳裡に描いて見る。其男は神が自分を憎んでゐることを感ずる。川の水を溢れさせ山の石を降らせて其の畑を荒さうとしてゐると思ふ。森林の怖ろしき静寂を以てその心を碎かうとしてゐると思ふ。又は死者の怨靈が毎夜に

風に乗つて忍び込んで其血を貪り吸はうと自分の胸の上へのしか、つて來ると思ふ。其處で男は小屋の低さと心の恐れと二重の闇に襲れて、鋭い曲り刃の刀を握つて見えざる怖ろしき者の喜を買はむが爲に、自らの咽を剗つて其血を流さうとする。其時恐怖と狂亂と死の接近とに眼眩んで、男は半ば無意識に、柔かに温い羊の毛に其手をさし込む。羊は男に近きもの、男に信頼するもの、血の温もりも暖かに、暗中に呼吸する生物である。男は一思ひに羊の咽に其刀を突き刺す。同時に温かな血は羊の毛と人の胸と腕とにポトリと滴る。一瞬間の間男は之を自分の血だと思つたに違ひない。自分の喉を洩れる歡喜の息遣ひが、死にかゝつてゐる獸のゼイ／＼する呼吸と交つて聞える一瞬間の間、昂揚したる存在の歡喜をば死滅の最初の痙攣と解釋したに違ひない。一瞬間の間男が獸の中で死んだればこそ、獸は彼れに代つて死ぬことが出来るのだ。獸が人に代つて死に得ると云ふことが斯くて大なる秘蹟となつた、大なる神祕的眞理となつた。

つた。男は象徴的行爲を完成した。獸は象徴的な犠牲の死を遂げた。此の事一切の根據は人が一瞬間獸の中に死ぬといふことにある。人の存在が一呼吸の間自分以外の存在に融解すると云ふことにある。之が一切の詩の根柢だ。此事を顯著なる點に就いて例證すれば、ハムレットが舞臺に立つて吾々を魅する限り吾の感情がハムレットの中に融ける。これ程確かなことはあるまい。又之を微細なる點に就いて例證すれば、思想の閃く極少の時間に際して彼の白鳥の羽毛はハムレットの皮膚と等しく吾々を捉へる。處が眞實に信ずるとは、それが眞實だと信ずることだ。唯此魔法は非常に僕等に近い、従つて之を認識するに非常に困難な丈の話だ。自然が人間の心を捉へて引張つて行くにはこの魅力以外に方法がない。この魅力が人間をひきずつて行く象徴の骨髄だ。さればこそ象徴は詩の要素となる。さればこそ詩は一物に代へるに他物を以てするのではなく。詩は言葉の爲に言葉を用ゐる。換言すれば人間の體に觸れて、之を不斷に

輪廻させて行く言葉の魔力の爲に、言葉を用ゐる。此處に詩の魔術がある。

クレメンヌ 何だか自分の血の代りに動物の血を注ぐ人の話が飛んで行つて了ひさうだ。君は人間が實際動物の中で死ぬと云ふのだね。人間は象徴の中に自ら融けると云ふのだね。

ガブリエル さうだ。象徴が人間を魅する力を持つてゐる限りは。

クレメンヌ 其力は何處から來るのだ 如何して人間が動物の中で死ぬことが出来るのだ。

ガブリエル 僕等と世界とは別物でないからだ。

クレメンヌ 君の思想は何だか不思議だ、何だか人を不安にする。

ガブリエル 丸で反對だ。限りなく心を静にする處があるぢやないか。假令一呼吸の短い間でも自分の重荷の一部分を他に移すことが出来るといふ程甘い思ふすることがあろうか。人間の體には一切が朦朧として押し込まれてゐる。此恐

ろしい重荷をば色々な姿で卸すことが出来るのは實に恵まれたることぢやないか。(明治四十五年正月抄す)

大正四年一月二十八日印刷
大正四年二月一日發行

著作
所
有

發行所

東京市神田區
南神保町十六番地

岩波書店

電話本局 五四二〇番
振替東京 二六二四〇番

【定價金壹圓參拾錢】
(郵税金八錢)

著作者

阿部次郎

發行者

東京市神田區南神保町十六番地
岩波茂雄

印刷者

東京市芝區愛宕町三丁目二番地
見常喜一

製本者

東京市日本橋區本銀町一丁目九番地
寺島藤次郎

エ2R36 68

版四第

夏目漱石先生著 並に装幀

こころ

自己の心を探へんと欲する人々に、

人間の心を探へ得たる此作物を奨む。

次 目

- 上 先生と私
- 中 両親と私
- 下 先生と遺書

定價 壹圓五拾錢

郵稅

其他外國	四拾錢	内地	拾貳錢
		鮮滿支	拾八錢

店書波岩 所行發

終

